

氏 名	まつ だ きよし 松 田 清
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	論 人 博 第 22 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	洋学の書誌的研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 稲 垣 直 樹	教 授 内 田 賢 徳	教 授 愛 宕 元
	教 授 金 坂 清 則	教 授 横 山 俊 夫	

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は江戸時代舶載洋書と関連資料を書誌学的、文献学的に、また比較文化史的観点から分析し、洋学知識の形成過程を解明することを目的としている。申請者は国内伝存洋書の書誌学的記述を手がかりに、その流伝の経緯、利用や翻訳の実態を探究するとともに、原書の出版事情、出版文化史をも調査し、語学、文学、美学、本草学、博物学、医学、地理学、天文学、兵学にわたる多くの新資料について考察している。

本論文は論考篇、書誌篇、目録篇の三篇からなる。

論考篇第一章「蘭学勃興期の舶載蘭書」では平賀源内、朽木昌綱、石川大浪、司馬江漢らが所蔵ないし利用した蘭学勃興期の舶載蘭書を書誌的に解明する。すなわち、源内におけるプリューシュ『自然の景観』、江漢におけるルイケン父子『人間の職業』(1694)、フラウエハルト『キリスト教的考察からなる教訓的象徴画集』(1727)およびニューホフ『東西海陸紀行』(1682)の受容、昌綱が入手したラ・クロア『世界地理全誌』(1705)およびプレヴォー『旅行記集成』(1746-1761)蘭訳の影響、大浪旧蔵のライレッセ『大画法書』(1707)と佐竹曙山の筆録『画図理解』との関連を追求する。第二章「林子平『海国兵談』自筆稿本をめぐる一、二の仮説」では、『海国兵談』諸写本とりわけ桂川本(子平の甥林丙吉の浄書本、天理図書館蔵)、森島本(仙台市博物館蔵)、藤塚本(塩釜神社祠官藤塚知明旧蔵、個人蔵)を比較検討し、子平病気のため自筆稿本が存在しなかったこと、藤塚本が天明7年の見本版、寛政3年版いずれにも版下作成用の種本として使用されたこと、「前野良沢肖像 自画并賛」(早稲田大学図書館蔵)はむしろ藤塚知明の肖像とすべきことを論証した。

第三章「『ドゥーフ・ハルマ』成立史の解明」では「ドゥーフ・ハルマ」の初稿(高知本、ドゥーフ自筆、1816年成)、第2稿(大阪本・パリ本、1817年成)、第3稿(中之島本、1834年成)の発展段階と他の諸写本(葵文庫本、シーボルト将来本、コック・ブロンホフ本)との関連を実証し、シーボルトの蘭和辞典出版計画挫折事情、ハルマ『蘭仏辞典』編纂の宗教的背景(亡命フランス新教徒問題)を解明した。第四章「新宮凉庭と蘭館医フェイルケ」では、出島における両者の医学交流を新資料の蘭文書簡(ドゥーフ自筆1通、凉庭宛フェイルケ自筆3通、香川大学神原文庫蔵)によって分析し、凉庭が語学力を生かして、ゴルテル、スウィーテン、フーフランド、コンスブルックなどの新医学書を撰取した過程を示した。第五章「江戸時代のプリニウス」では、天明期にプリニウス『五卷本博物誌』蘭訳が阿蘭陀通詞の松村元綱や志筑忠雄によって珍説奇話の典拠として断片的に利用されたこと、文政4年渡来の駱駝に触発された通詞中山作三郎の『夫利仁由須駱駝之説』はハウトゥイン『リンネ氏の体系による博物誌』所載のプリニウスの記述が典拠であること、この博物誌の「人間論」を抄訳した宇田川榕菴は異教的なプリニウスの人間観とキリスト教的なハウトゥインの人間観の両方を認識したことを論じた。第六章「黒田麴廬研究のために」では、デフォー『ロビンソン・クルーソー』の本邦初訳『漂荒紀事』(1850年頃成)の典拠がオランダ語完訳本の初巻(初版1721)であることを証明するとともに、訳者黒田麴廬の初期翻訳の原書を解明し、旧蔵洋書目録と関連資料の翻刻を添えた。第七章「海洋への眼差し」では、蘭学生所丁輔筆写の長崎海軍伝習講義録、加賀藩洋学者鹿田文平の業績(ペキサンス原著『海軍要略』の翻訳、蒸気船一番丸図、英詩「忠孝廉節四大字歌」)、土佐藩旧蔵

洋学資料（英書『図説蒸気船グレート・イースタン号』、海事関係蘭書）をもとに幕末海事思想を比較文化史的に考察した。

書誌篇では松浦静山が収集した平戸藩楽歳堂洋書の形成過程と文化年間に幕府天文台へ貸し出された楽歳堂洋書の軌跡を追究し（第一部）、現存する静山旧蔵洋書61点を書誌学的に記述、解題を加えた（第二部）。商館長ティチングが静山のために署名した「蚕錨図」（第三部）、天文方渋川家文書欧文資料（第四部）、坪井信道、為春父子旧蔵の洋学資料（第五部）についても、厳密な書誌的検討を加えた。

目録篇では蘭学を推進した幕末雄藩のなかで蘭書が比較的まとまって伝存する仙台藩と佐賀藩に注目し、書誌的に詳細な蘭書目録を作成した（第一部、第二部、第三部）。第四部『杏雨書屋洋書目録』第1部では長州藩旧蔵洋書79点ほか、ドドネウス『草木誌』（1644）、ミュンチング『陸上植物精説』（1696）、フーフランド『医学提要』（1838）などの貴重な江戸時代舶載蘭書、および蘭学の背景となる近世ヨーロッパの博物医学薬学書を含む、総計374点（タイトル）を記述した。

本論文に関連する論文5点と目録1点を、参考論文として付した。

論文審査の結果の要旨

申請者の提出した主論文「洋学の書誌的研究」は、同名の著書（臨川書店、平成10年9月、780頁、論考篇と書誌篇からなる）と過去4年間に出版された江戸時代舶載蘭書目録3種および貴重な江戸時代舶載蘭書多数を含む『杏雨書屋洋書目録』第1部（臨川書店、平成18年1月、297頁）、計5冊（通計1441頁）によって構成され、論文5点と目録1点が参考論文として添えられている。

主論文、参考論文に一貫している研究方法は、江戸時代に舶載された洋書の行方、利用や翻訳の実態、西欧における出版事情を解明し、国内伝存本および在欧資料の探索と記述を行うというものである。従来の洋学史研究は洋学者の業績内容を、利用された洋書（ほとんどが蘭書）の原典に遡って解明するよりは、伝記的研究または系譜的研究にとどまる傾向が強かった。その大きな原因に、資料的制約がある。国内に伝存する舶載蘭書はその多くが容易に閲覧できない状態におかれ、目録も整備されていない例が多いためである。申請者はこの困難をよく克服し、全国各地の所蔵先に訪書して、極めて詳細な書誌データを集積し、海外訪書によって得た書誌データと結合することに成功している。

申請者はその徹底した書誌的探索によって数多くの新資料を発掘し、既存の資料についても新知見をもたらしている。すなわち、福知山高等学校所蔵「動物図譜」の筆者（司馬江漢）と典拠（ニューホフ『東西海陸紀行』1682など）、司馬江漢「シンネベール」（教訓的象徴画）説の典拠（フラワーウェハルト『キリスト教的考察からなる教訓的象徴画集』1727、愛日文庫所蔵）、秋田蘭画の理論書である佐竹曙山『画図理解』の典拠（ライレッセ『大画法書』1707、京都大学附属図書館所蔵）、林子平『海国兵談』の版下作成用の種本（子平のパトロンであった塩釜神社祠官藤塚知明旧蔵写本）、前野良沢肖像の新解釈（藤塚知明肖像説）、蘭和辞典「ドーフ・ハルマ」初稿（ドーフ自筆本）の発見と諸写本の系統の解明、新宮凉庭宛蘭館医フェイルケの自筆蘭文書簡、天明期の阿蘭陀通詞にプリニウスとして知られた『五卷本博物誌』蘭訳（松浦史料博物館所蔵）、中山作三郎訳「夫利仁由須駱駝之説」および宇田川榕菴訳「リンナス嚙乳動物篇」の典拠（ハウトゥイン『リンネ氏の体系による博物誌』）、黒田勘廬訳『漂荒紀事』の典拠（デフォー『ロビンソン・クルーソー』蘭訳初巻）、忘れられた加賀藩洋学者鹿田文平の新資料、横浜絵の代表作である五雲亭貞秀『墨利堅国大船之図』の典拠（『図説蒸気船グレート・イースタン号』1860）など、枚挙に遑がない。しかも、いずれの場合も、典拠となった原書の出版文化史的背景をふまえて、比較文化史的考察を加えている。

書誌篇は全5部のうち3部が蘭癖大名松浦静山のコレクション楽歳堂文庫にかかわる詳細な書誌的研究となっており、その収集蘭書および西洋画像資料・器物資料の全貌が初めて書誌的に解明されたことは、18世紀後半の日欧知識交流史研究に新たな学術的基礎を提供したと評価できる。のみならず、文化年間に幕府天文台で推進された文献情報による北方研究が楽歳堂から貸し出された蘭書に多く依拠していたこと、その貸し出し経路の分析により、老中首座松平信明、若年寄堀田正敦、天文方高橋景保、その手代として蘭書解説に従事した馬場佐十郎という、蘭書をめぐる人脈が浮き彫りにされたことは、発展期の蘭学の実態を解明したものとして高く評価される。静山による蘭書収集の背景としてオランダ商館員の所蔵蘭書は重要であり、申請者が死亡商館員の財産目録の分析から得た舶載洋書の数々は、出島における知られざる読書生活に光をあてたものとして秀逸である。

書誌篇においても、商館長ティチング署名「蛭錨図」および付属文書、天文方洪川家文書欧文資料、坪井家旧蔵洋学資料など、新資料が詳しい目録と共に書誌的に研究されている。

目録篇は舶載蘭書目録3冊と武田長兵衛収集「杏雨書屋」の古洋書374タイトルを記載した『杏雨書屋洋書目録』第1部からなる。第一部『宮城県図書館伊達文庫蘭書目録』は仙台藩藩校養賢堂または医学校旧蔵の蘭書、フランス語、ラテン語、ドイツ語、英語の図書、総計126点、第二部『佐賀藩旧蔵蘭書目録』は武雄鍋島家旧蔵蘭書、佐賀鍋島家旧蔵蘭書、野中家所蔵蘭書、好生館所蔵蘭書、佐賀県立西高等学校所蔵洋書、金武良哲旧蔵蘭書、総計212点の詳細な書誌目録である。また、第四部の『杏雨書屋洋書目録』第1部には、長州藩旧蔵洋書79点を収録する。ここでは、幕末雄藩において摂取された洋学知識の典拠が一冊ごとに頁レベルまで分析されており、今後の書誌研究の模範となっている。第三部の『佐賀鍋島家「洋書目録」所収原書復元目録』は、嘉永5年（1852）から慶応2年（1866）まで、佐賀鍋島家で洋書の管理と出納に使用された「洋書目録」を翻刻し、総点数530点について、同定した原書の著編者、書誌事項、書名和訳、注記を加えたものである。この復元目録は、戦前から注目されつつ書誌的に未解明であった本資料を初めて利用可能な信頼できる史料として提供しており、学界に大きな貢献をすることは明らかである。

以上のように、本論文は、舶載洋書の原本・原典の同定にまで遡り、それらの執筆・成立の背景にあるヨーロッパの思想・価値観の側からもそのありようを捉え直すことで、従来、舶載洋書の日本における受容に力点が置かれるきらいがあった洋学研究の在り方を根底から革新し、そのパラダイムシフトを促したものであり、本研究科共生文明学専攻にふさわしい内容を備えた研究成果と判断される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年11月27日（専門知識の確認）および12月25日（公聴会）、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。